研究余滴

手を携える李白

狩野　雄

咲き始めたばかりの芙蓉の花に天露が降りて朝が来ようとしている。

——李白はどんな手をしていたのだろう。

初夏の払暁、期日の迫った原稿を寝床に持ち込んで読み返しながらそんなことを考えていたら、傍らで眠っている娘が泣き出した。仕事の手を止めて、眠ったまま泣いている娘の手を握ってやろうとして気がつく。

手が随分大人びている。光の加減で陰影がついたこともあるのだろうが、そこにあるのは、一箇の完成した手であるように見えたのである。

——ああ、大きくなったな。

つくづくそう思い、そっと握りながら、その手のいつもと変わらない小ささに苦笑する。

——ちち、おてて。

怖い夢を見ないオマジナイとして、手をつないで眠る。寝かしつけるようになってからの変わらぬ習慣である。オマジナイの祈りが足りないからか、夜中や明け方に泣きだすことが今でもごくたまにある。寂しい夢であったり、怖い夢であったりするようだが、そんな時も、手を握れば大抵は安らかな寝息に落ち着いてゆく。多少の効きめはあるらしい。

手によって得られる安心感は、温もりと包まれる感覚によってもたらされるものなのだろう。つながっていると感じることである。手をつなぐことで得られる安心感ということで言えば、大きな手の側にもある。階段を降りる時、駅のホームを歩く時、手をつないでいれば安心

できる。庇護しようとする手の想いである。それは、しかし、反対から見てみれば、制御される、支配されるということにもなりかねない種類のものであり、小さな手がいずれそう感じるようになることは致し方ないことだ、と大きな手はそろそろ自らに言い聞かせ始めている。

手を繋ぐ、手を取る、手を牽く、手を握る——漢字が異なり、訓が違っていることが端的に示しているように、手に対する行為・意味もそれぞれ少しずつ異なる。現在の父娘のものはどれだろう、やがてどうなるのがいいのだろう。手探りの思考。

李白に「終南山より下り斛斯山人を過(よぎ)りて宿し置酒す」[1]という古体詩（全十四句）があり、その第三聯（第五・六句）に次のようにある。

相攜及田家　相携えて田家に及べば
童稚開荊扉　童稚も荊扉を開く

終南山で斛斯という名の山人に李白は出会い、[2]意気投合して山人の家へと足を運んだところ、子供たちが柴の戸を開いて迎えてくれた、という。二人の意気投合ぶりは「相攜」＝手を携えるという行為に象徴されている。

ところで、漢文を教える身にとって、「相」は少し厄介な存在である。それは、「みる」「たすける」という動詞の場合なら比較的明確な違いが、「あい」と訓(よ)む場合には、不分明となることがあるからである。「相(あい)」には、必ずしも訳出されることのない、下に来る動詞が動作を及ぼす対象を有していることを示す目印として機能することがしばしばある。つまり、その場合の「相」には「あい」と訓んでも「たがいに」という意はなく、「あい」と訓みながら「たがいに」という意味を排除しなくてはならないのである。さらに、このように決まっているのならまだしも、「あい」と訓んで「たがいに」となることもまた一半なので少々悩ましい。それはちょうど、「相思相愛」という四字の熟語として見れば揺るぎない両想いも、ひとたび「相思」と「相愛」に分けてみれば、語が置かれた文脈の中で、片想いと両想いの間に揺れることとなるといった具合に。ただ、この詩における「相」は、今日のわれわれに馴染みの「たがいに」で解していいのだろう。詩は、ともに俗世を軽んずる二人が互いを知って手を取り合ったことを詠っているのだから。

『論語』に、人を知ることの難しさや人に知られないこ

とを受け容れることの意味が繰り返し説かれているように、本当の意味で人を知り、己を知ってもらうことは難しい。李白の詩歌にも、己が知られない、理解されないことの愁いが詠われている。例えば、「薛校書に贈る」[3]という詩の冒頭に「我に呉越の曲有るも、人の此の音を知る無し」と見えるが、この「此の音」は、伯牙と鍾子期の「知音」の故事[4]を踏まえなくとも、詩人の心に近いものであることが窺知されよう。

だから歌うのだ、と詩人は言う。「悲歌行」[5]は「悲しいかな、悲しいかな」と詠じ起こされるが、続いて「主人に酒有るも且らく斟む莫かれ、我が一曲の悲来吟を聴け。悲しみ来たって吟ぜず還た笑わざれば、天下に人の我が心を知る無からん」と歌われる。吟じなくて笑わなければ誰も我が心を解しはしない、だから、私がここにいる証として声高く歌うのだ、と詩人は言うのである。

知られないことの悲哀は、つながらないことへの歎きであり、人間がその本質において交換（交感・交歓）を欲する社会的存在である以上、最も耐えがたい苦しみの一つであるだろう。そしてその分、知音を得た歓びは、大きく、深い。

斛斯山人という知音を得た喜びを詠じた詩には解放感にも似た明るさがある。「知」られたとは表現されていないが、李白の心は山人によって知られたのだと思う。

そもそも「知る／知られる」ことが最も強く意識されるのは、「知られない」状況においてであり、あるいは、取り返しのつかない状況[6]においてであろう。志を言うのが詩であるならば、「知る／知られる」ことに関しても、知り得ない、知られ得ない悶えこそがまずはうたわれて然るべきなのである。

哲人や詩人が「知る／知られる」を問題にしているということは、それがわれわれを取り巻く情況の中にも本質として満ちていることを意味する。たとえ手垢にまみれた主題であったとしても、そこに人間の精神的本質が見出されたならば、彼らはためらうことなく線を引き、印を附け続けることだろう。

大きな手と小さな手の間にもこの問題は横たわっている。六歳の秋、娘の上顎の前歯は、生えかわるべくして抜けた（最後には父が抜いた）。今の彼女の口は至って開けっぴろげで、実に風通しが良さそうだ。やがてその並びの奥に「親知らず」なる第三大臼歯が生えてくる気配は微塵も窺えない。そして、そのことと比例するように、秘密などとは無縁であるかに見えるが、家人によれば娘

には既に父には言えないことがあるらしい。とすれば、親知らずが生えてくる頃、いったいどれだけ父に言えない秘密を抱えていることだろう。親知らずが生える前に横たわる、思春期という嵐の季節を生きる娘をこわごわ想像してみる。手で目を覆いながらの思案。

子供には子供の、親には親の、世代の違いによって知られない不満があるものであるが、それぞれの世代にはそれぞれの世代に属する常識や論法によって理解されることもあるものである。この意味において最も厄介なのは、子供でもあり、大人でもあるがために、どちらでもない不安定な季節を生きる、いわゆる思春期の人たちで、彼らは、精神と身体の両面において、箇々の置かれた情況の差異が大きいために、往々誰にも理解されないと感じ、その鬱憂を抱きながら知友を探し続けるのである。このヒリヒリした切実な感覚は詩人のそれに近い。

そうであるならば、思春期を生きる娘には、李白が「我が一曲の悲来吟を聴け」と詠ったように、言葉を持っていて欲しいと思う。別に僕に向けてである必要はないから、自分なりの言葉でもって知己を得てくれたらと願う。そしてそのためには、父親孔子が息子孔鯉に教え諭したように、「詩」を、外に在る言葉を学ばなくてはならない。

陳亢 伯魚に問うて曰く、「子も亦た異聞有るか」と。対えて曰く、「未だしきなり。嘗て独り立つ。鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、『詩を学びしか』と。対えて曰く、『未だしきなり』と。『詩を学ばざれば以て言う無し』と。鯉退きて詩を学ぶ。……」

〔論語　季氏第十六〕(7)

「詩」は現在のいわゆる『詩経』の詩篇を指すと考えられるが、今日的には、広く古典作品としても良いだろう。自分の外側に在る言葉と向き合うことによってはじめて自らを知る、そういうかたちでしか自らは存在し得ない、と孔子は云っているのだと解したい（また『論語』だ。ただ、別に向き合う言葉は儒家のものである必要はない。向き合った言葉が、老荘の、混沌のままにあれ、というのでももちろん好い）。

内側に言葉がないわけではないが、何かに行き詰まったという時、大抵は自らの言葉に行き詰まっているものなので、言葉は外側に在ると考えた方が格段に風通しは良くなる。意気投合した李白と斛斯山人も、生得の鐘を

響かせ合ったばかりでもあるまい。先人の書を読むことや他者との語らいを通して、自らの外側に在る言葉とたくさん出会い、鐘を陶冶したはずだ。外からやって来た言葉に鍛えられ磨かれた鐘は人の心に届く音を含むようになる。他者の言葉に耳を傾けるように、書物の中で待っていてくれる言葉と出会うことは、言葉の世界を色褪せさせないという意味でも、別に世界を持って嵐をやり過ごすという意味でも、やってみる価値がある。

李白の「終南山より下り……」の詩は、次の二句で結ばれている。

我醉君復樂　我酔うて君も復た楽しみ
陶然共忘機　陶然として共に機を忘る

李白と斛斯山人の二人は、忘憂物たる酒の霊力にもあずかって、現実の時間も空間も忘れて溶け合うように互いを知る境地へと至った。「復」にしろ、「共」にしろ、ここには、相携えた手がもたらした幸福感が充ちており、水平方向の友情だけが読み取られる。こうした人間関係には気持ちの好い風が吹く。制御―被制御といった縦の関係があったとしても、互いに知るということはあり得るだろう。しかし、互いに知るとなったその刹那、一陣の風が立ち、垂直方向の力学は無効化するのではないか。そんな関係がいくつもある人生は豊かだ。

二人の関係は、知るとか知られないとか頭で考えるという理屈よりも、手を取って携えるという身体性に単純に根差しているのであろう。それは、釣瓶落としの秋の夕暮れに娘の手を牽いて帰ってもわかることである。ただ、金木犀の芬香に包まれて秋が秋らしくなってゆくこの時期は、あれこれ物思いに耽るのに相応しくもあり、つい冗弁を弄してしまうのだ。

嵐が通った翌朝、そこここにオレンジ色の絨毯が敷かれて金木犀が散った。今年の秋も深まり始めている。大きな手は、そろそろ筆を執って拙い字をしたためるという修行に出なくてはならないのであるが、庇護を必要とされる今ばかりは、やがてやって来るであろう、手を離す時へ向かって想いを致しつつ、精々小さな手と繋いでおきたいと願っている。

双方向的ではない「相」の時代が済んで、手を離す時が来れば、あまり自信はないが、潔く手を放し、手の代わりに幾篇かの小文を手渡すこととしたい。その時に親

知らずが生えているなどということはないだろうが、何かのよすがにでもなれば嬉しいし、その先には、李白と斛斯山人のように「相（たがいに）」手を携えられる日が来たらんことを想うこととしよう。

山人の家を訪れた時、やがて理解し合える日が来る者として、李白も童稚（こどもたち）の手を取ったのではないだろうか。

【注】

（1）暮従碧山下、山月隨人歸。却顧所來徑、蒼蒼橫翠微。相攜及田家、童稚開荊扉。綠竹入幽徑、青蘿拂行衣。歡言得所憩、美酒聊共揮。長歌吟松風、曲盡河星稀。我醉君復樂、陶然共忘機。

〔李太白全集巻二十「下終南山過斛斯山人宿置酒」〕

（2）この詩に名前の見える斛斯山人と李白がどのように出会ったかについてはよくわからないようである。「相攜」に関しても必ずしも定まっていないようであり、終南山にともに登った友人たちと手を携えてという解釈も見られる（武部利男『李白』・大野實之助『李太白詩歌全解』）が、今は『唐詩鑑賞辞典』（上海辞書出版社）に収められている沈熙乾氏の解釈に従っておくこととする。

（3）我有呉越曲、無人知此音。姑蘇成蔓草、麋鹿空悲吟。未誇觀濤作、空鬱釣鼇心。舉手謝東海、虛行歸故林。

〔李太白全集巻九「贈薛校書」〕

（4）『呂氏春秋』に「知音」の語でよく知られる、伯牙と鍾子期の故事が見える。

伯牙鼓琴、鍾子期聽之。方鼓琴而志在太山。鍾子期曰、「善哉乎鼓琴、巍巍乎若太山」。少選之間、而志在流水、鍾子期又曰、「善哉乎鼓琴、湯湯乎若流水」。鍾子期死、伯牙破琴絶弦、終身不復鼓琴、以爲世無足復爲鼓琴者。

〔呂氏春秋　本味〕

（5）悲來乎、悲來乎。主人有酒且莫斟、聽我一曲悲來吟。悲來不吟還不笑、天下無人知我心。君有數斗酒、我有三尺琴。……

〔李太白全集巻七「悲歌行」〕

（6）『史記』刺客列伝では、人を知るというフレーズが、刺客である豫讓自身や聶政の姉政によって発せられた「士は己を知る者の爲に死す」という言葉を象徴として、抜き差しならない場面や刺客が落命した後において立ち現れてくる。刺客落命後の例として、荊軻の話の最後に添えられている、魯句踐の独白を掲げておこう。

魯句踐已聞荊軻之刺秦王、私曰、「嗟乎、惜哉、其不講於刺劍之術也。甚矣吾不知人也。曩者吾叱之、彼乃以我爲非人也」。

〔史記巻八十六　刺客列伝・荊軻〕

ここで発せられている、「甚だしきかな、吾の人を知らざるや」は、短い歎声に過ぎないけれども、決して軽いものではない。

（7）陳亢問於伯魚曰、「子亦有異聞乎」。對曰、「未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰、『學詩乎』。對曰、『未也』。『不學詩無以言』。鯉退而學詩。……」

〔論語　季氏第十六〕

（本学教授）